



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	お伽草子『墨染桜』における梅(fulltext)
Author(s)	中島,萌
Citation	学芸古典文学(11): 87-97
Issue Date	2018-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2309/150056
Publisher	東京学芸大学国語科古典文学研究室
Rights	

お伽草子『墨染桜』における梅

一、はじめに

『墨染桜』とは、桜と梅、薄が織りなす三角関係を発端とする、木勢と草勢の合戦を描いたお伽草子である。謡曲にも「墨染桜」という同題の作品があるが、ストーリーは全く異なるものである。また、当初は『すみそめさくら』（以下『墨染桜』と統一する）という題で出版されたが、後に江戸の版元からは『草木太平記』と改題され出版されたこともある。詳しい書誌情報は後述するが、本多朱里氏は、現在確認されている『墨染桜』の最初のものである承応二年（一六五三）に出されており、近世初期に書かれたものであると限定できると述べている（注1）。

今回本文とした『墨染桜』は『室町時代物語大成第八巻』に収録されたものである（注2）。この本文も含め、『墨染桜』には平仮名が多く用いられている。しかし、梗概や論考を進めるにあたり、読みやすさ、わかりやすさも優先したいと考える。先行研究等で漢字にて表記され、またそれが妥当と考えられるものについては、本文では平仮名で記されていたとしても、引用する場合でない限りは、漢字で述べていくこととする。

まず、梗概を以下に述べる。

草木元年、不思議の合戦が起こった。その由来を尋ねると、老薄が吉野里の八重桜を籬の間から見初めたことから始まる。薄は玉章を送るが、桜は梅の薫大将と恋仲であるためになびかなかった。しかし、宮城野の小萩の仲介により薄と桜は結ばれることとなる。その事を知った梅の薫大将は、薄の根葉を枯らすと怒りに燃えた。薄は桜を草むらに隠しおき、本国武蔵野へと下り草の勢を集めて合戦の支度をする。多くの草が集まり、さらに須磨や明石の藻塩草も草の仲間として加勢するのであった。梅の薫大将も対抗して一門を集め、多くの木々が吉野山に勢ぞろいした。また、茶木たちはどちらに着くこともせず、宇治に控えることにしようとして評議を下す。茶壺も茶木に従い、宇治へと詰め寄せるのであった。（以上上巻）

京わらびが北山で見物する中、ついに合戦が始まった。まず、難波津の葦が先陣に進み、鴨川を渡って桜と名乗り合い、ぶつかった。続く二陣は藤と老松との合戦である。松は藤や夕顔を引きちぎった。さらに菊と紅葉が争う。桃が射殺され、次第に

中 島 萌

草の勢が優勢となつてゆく。ついに草は木勢の城を七重八重に取り囲む。二心あるさつきが花火を仕掛けたために、木の勢は鞍馬へと落ちることとなつた。そこに楠木正成が現れ、油断する草の勢を背後から急襲し薙ぎ払う。木勢は力を得て奮戦し、戦況は一気にひっくり返つた。薄は自らより起こつた戦と覚悟を決め、刈萱の道心坊にあとを頼んで自刃する。八重桜は薄の死を知り、後を追おうとするが、薄の弔いをするを思い立つ。出家して墨染桜となるのであつた。(以上下巻)

前に述べた改題本である『草木太平記』と『墨染桜』との間に物語の大きな変化はみられず、どちらも右に記したような梗概である。

『お伽草子事典』によると、本作品は異類合戦譚に分類される(注3)。『鴉鷲合戦物語』や『精進魚類物語』の流れを汲む作品と言える。異類物の中でも、擬人化された動植物と人間による異類婚姻譚はお伽草子に数多い。しかし、『墨染桜』は恋愛が合戦の発端となるとはいつても、植物同士の恋愛であり、人間の姿が登場しない。勝負の判定を下す存在としても人間は現れないことも特徴の一つと考えられよう。加えて、先行研究で指摘されている本作品の特徴を次項でまとめておきたい。

二、先行研究概観

書誌情報については本多氏の論に詳しい(注4)。氏は『墨染桜』と『草木太平記』との諸本は五種あるという指摘の上に立ち、現在の保管場所を含め、それぞれの書誌情報を整理している(注5)。

簡単にまとめると以下の通りである。

- (一) 承応二年(一六五三)版『すみそめさくら』木曾屋次郎兵衛、藤屋次郎左衛門刊(京都)
… 東京大学国文学研究室蔵本、天理大学附属天理図書館蔵本(上のみ)、松本隆信氏旧蔵本。二巻二冊。挿絵なし。
(本稿の本文はこれに拠る)
- (二) 寛文三年(一六六三)版『すみそめさくら』度々市兵衛刊(京都)

… 国立国会図書館蔵本、二巻一冊。挿絵七丁が加えられる。

- (三) 元禄五年(一六九二)版『すみそめさくら』度々清兵衛刊(不明だが、(二)との密接な繋がりを指摘する。)

… 未見とのこと。

- (四) 延宝九年(一六八一)版『草木太平記』松会刊(江戸)

… 東京大学附属図書館霞亭文庫蔵本。上巻のみ一冊。

- (五) 刊年不明(おそらく元禄頃)『草木太平記』古藤七郎兵衛刊(京都か)

… 京大本。『草木太平記』の完本は確認され得る限りこれのみ。

なお、写本は未だ見られない。

推察であると本多氏自らが述べている部分もあるが、おおむねこの通りであろう。これに則り考察をすすめていきたい。

『草木太平記』と改題され出版したのは、江戸の書誌が最初であったようである。それからほぼ十年経つた後、京都の書誌との

深い繋がりがうかがえる書誌は『墨染桜』として出版している。「度々」という名から、同じ版を用いている可能性も否めまい。それゆえに『墨染桜』そのままに出版されたとも考えられる。この可能性の証明には、原本にあたっての調査が必要であり、本稿で明言することは避けたい。あるいは、『草木太平記』よりも『墨染桜』とした方が、京都・上方で売るにあたり、読み手に受け入れられやすいと思われたとも考えられる。

しかし京都大学附属図書館蔵本は、京都の書誌の手によると思われるのにもかかわらず、『草木太平記』と改題されている。(三)の「度々清兵衛刊」よりも後の出版であれば、京都においてもどちらの題名が良いか、書誌が悩んだあとが見られるように思われ、大変興味深い。どちらにせよ、京都と江戸の書誌がお互いに影響を与えながら、草子を刷っていたことがわかる。

古歌が用いられ、本文全体に歌語が多く散りばめられていることも特徴の一つとして指摘されている。さらに、中古等の物語からの影響も見られる。八重桜に薄が送った手紙を少々長くなるが以下に引用する。

さても、たかまの山の、みねのはな。よそながら、見よしの
ゝ。こひそめすすき、ほにいでゝ、みだれこゝろをつくく
し。すぎなのたつも、つらからしと。かきおくられたる、す
みれのいろ、みるに思ひのふかみぐさ。

はなちるさにと、やどりきの。身をつくしても、あかしがた。
とわたるふねの、かぢのはに。かくともつきぬことのはを。
たれかははなに、ゆふぎりの。たつなをながす、かわたけや
なみだひまなき、かげろうの。日かげまつまの、つゆのみに。

ふかきおもひを、しひがもと。すゑつむ花のゑんとなり。む
ねのうすぐも、はるかぜの。ふきもさだめぬ、つまゆへに。
なげくこてふの、ねもたかき。

ふじのうらばに、おくつゆを。はらひかねたる、よもぎうの。
やどにかたぶく、枕だに。ゆめのうきはし、なかたへて。ふ
みまよひゆく、たまづさの。むすぶちぎりとなれかしと。い
のるさかきの、いろふかき。

わかむらさきの、こひごろも。うらみがちなる、きみをだに。
せきやにかけて、まつかぜの。ふくにみだるゝ、たまかづら。
ながきおもひを、すゝきさへ。こひのゆかにぞ、ふしにける
しげきのゝ、くさのねごとに、われぞなく、一むらすゝき、
うへそめしより

このようにわかりやすく『源氏物語』の巻名が織り込まれている。冒頭部分に登場する手紙に有名な『源氏物語』の巻名を用いることにより、この後の物語中にこういった一種の引用や引き歌が散りばめられていくことを読者に予感させることである。実際に『太平記』はもちろん、『伊勢物語』や『平家物語』をもとにした部分が見られるのである。

『草木太平記』と改題されたこともあり、『太平記』との関連については先行研究でも多く触れられている。中でも後藤丹治氏の詳細な論考が備わる(注6)。氏は本文を比較しながら、「雲客車より下るゝ事」「勾当内侍事」「大森彦七の事」との関係もあるのではないかと述べている。とりわけ「塩治判官讒死事」との関係は深く、後の項で引用するが、成立の事情にも関わっているので

はないかと示唆している。

三、『太平記』との比較

前項で述べた後藤氏が筆頭に、『墨染桜』は『太平記』の特に「塩治判官讒死事」との共通性が指摘されている。「塩治判官讒死事」の内容を簡単に記すとすれば、次のようにならう（注7）。

当時の権力者高師直が、塩治判官高貞の北の方に横恋慕した。彼女を奪い取るために、高師直は塩治判官について讒言する。身の危険が迫っていることを察した高貞は、北の方や一族を連れ領国出雲へ逃げ帰ろうとするが、師直の軍勢の追跡のためにあえなく非業の死を遂げることとなった。

これを踏まえ、『草木太平記』の人物たちと対応させてみる。高師直に相当するのが老薄、塩治判官高貞が梅の薫大将、そして北の方が八重桜となる。

ここで、恋の仲介役となる小萩に注目したい。小萩は「宮木のこはぎ」とされている。宮城野は萩の名所として有名な歌枕であるため、小萩に付されることに違和感はない。さらに、小萩について「もとよりこはぎ。かやうの事に、さかしきものなれば」とも表現される。これは、桜からの返事がもらえず落ち込んでいた薄に、どのような花も「はなのいろは、うつりにけりな、いたづらに」というように移ろっていくものなので、靡かせることができるかと力づけ、歌を代わりに書く場面でのことである。「はなのいろ」を桜の気持ちに読み替え、言葉遊びのように和歌を引いている。つまり、「かやうの事」とは、恋愛や歌の道だと想定することができる。

「塩治判官讒死事」においても高師直の恋を手助けする存在として、和歌に精通する人物が登場する。『墨染桜』では小萩一人のみによる手助けであったのに対し、『太平記』では北の方の美しさを紹介し、直接のやり取りを行う侍従の局、恋文の代筆を行う能書家兼好、返事が来ないと憤る高師直を慰め、和歌によって取り持とうとした薬師寺二郎左衛門尉公義という三人が順番に手助けをする。結局恋が実ることはなかったものの、中でも一番の働きを見せたのは公義であった。この公義こそが、和歌を得意としたとされているのである。

公義は「人皆岩木ナラネバ、何ナル女房モ慕ニ靡ヌ者ヤ候ベキ。今一度御文ヲ遣サレテ御覧候へ」と言って、和歌を詠んで師直から北の方への代筆とする。これまでは手紙を見ようとしなかった北の方は、この「返スサへ手ヤフレセント思ニゾ我文ナガラ打モ置レズ」と書かれた文に対し次のような反応を見せる。

歌ヲ見テ顔打赤メ、袖ニ入テ、立ケルヲ、媒サテハ便リアシカラズト、袖引ヘテ、「サテ御返事ハイカニ。」ト申ケレバ、「重ガ上ノ小夜衣。」ト計云捨テ、内へ紛入ヌ。

結果として、返答はお断りであったが、何かしらのリアクションを見せているのは間違いない。高師直は、北の方の「小夜衣」の意味をも理解し伝えた公義に「嗚呼御邊ハ弓箭ノ道ノミナラズ、歌道ニサへ無雙ノ達者也ケリ。イデ引出物セン」と喜びを露わにする。歌によって褒美を手に入れ、「高運」であったとされるのである。小萩が和歌を用いて桜の心を動かすのは、公義の姿を映していると考えられる。

萩という植物に設定した理由も興味深い。『太平記』の中で、侍従の局と兼好、そして公義の三人が萩と関連付けて語られることはない。『墨染桜』の作者が、薄の相談役としてふさわしいものとして、萩を設定したと考えられるのである。

理由として考えられることとして、まず和歌からの影響が挙げられよう。『国歌大観』を見ると、薄と萩が同時に詠み込まれる歌が存在する（注8）。特に『万葉集』の二二二一番歌と二二八五番歌、三六八一番歌に注目したい。

⑩ 221 わがかどに もるたをみれば さほのうちの あきはぎすき おもほゆるかも

⑪ 285 あきはぎの はなののすすき ほにはいでず あがこひわたる こもりづまはも

⑫ 381 かへりきて みむとおもひし わがやどの あきはぎすき ちりにけむかも

右の三首には「萩」「萩」「すすき」が全て詠み込まれている。ただ全てが単語として詠み込まれるというだけに留まらず、二二二一番歌、三六八一番歌には「あきはぎすすき」という一まとまりとなって和歌に詠まれていることには着目すべきであろう。「あきはぎすすき」は『夫木和歌集』五〇一三番歌にも登場する。

⑬ 513 わがかどに もる田をみれば さほのうちの あきはぎす

すき おもほゆるかな

部立としては萩の部に配されている。萩と薄がこのように共に詠まれるのは、単純に両方が萩の草花であるというだけではない。木下武司氏は日本の植生から以下のように述べている（注9）。

わが国の自然環境ではハギが生える草原は、森林が火入れなどで破壊された後に成立する代償植生であり、（中略）ハギが生えるのはススキ原のような乾燥した草原（後略）

萩は薄の草原の中にある植物だったのである。

また、恋愛や歌に精通した人物と言えば、光源氏が連想される。思い返せば、光源氏が幼いころ、父帝が源氏を萩に見立てて詠んだ和歌もある。『墨染桜』の小萩が、光源氏を模しているとは思えないが、小萩とは雅なイメージを持った花としてあったのではないであろうか。

このように和歌を中心としてイメージをふくらませ、『墨染桜』の作者は和歌的な薄の恋の協力者として萩という植物を選んだと考えられる。

『墨染桜』と『太平記』「塩治判官讒死事」の最も大きな違いとして、薄の横恋慕が成就する点があげられよう。本来、『太平記』においては高師直の横暴な振る舞いの一つを描く場面であり、彼の横恋慕は実らない。しかし、八重桜は梅の薫大将を捨て、老薄の元に行くのである。

そもそも『太平記』の高貞がどのような人物であると設定されているのか、象徴的であると思われる部分をいくつか引用する。

「(前略) 若出雲・伯耆ニ下着シテ、一族ヲ促テ城ニ楯籠ル程ナラバ、ユ、シキ御大事ニテ有ベウ候也。」ト申ケレバ、「ゲニモ。」ト驚騒レテ誰ヲカ追手ニ下スベキトテ、其器用ヲ撰レケル。當座ニ有ケル人々、我ヲヤ追手ニサ、レント、カタツヲ飲デ、機ヲ攻タル気色ヲ見給テ、此者共ガ中ニハ、高貞ヲ追攻テ討ベキ物ナシト思ハレケレバ

右は、高師直の讒言により、もはや本国に帰つて義兵を起こし戦うしかないと考え逃げ出そうとする、高貞の追手を決める場面である。追手も並大抵の人物では務まらないと考えられ技量ある武士だったことがわかる。山名時氏が高貞の逃げた播磨路から、桃井直常・太平が北の方の落ちた丹波路から追いかけることとなつた。この移動の中で北の方は追い詰められてしまう。次男のみを近くにあつた辻堂にいた修行者に預け、自らはその他の子らとともに火をかけた小家の中で腹を切つて死ぬのである。

高貞はなんとか出雲国へと下着するが、そこも安全な場ではなかつた。恩賞を目当てに親類までもが彼の命を狙つていたのである。一戦しよう和高貞は考えるが、丹波路から落ち延びてきた忠言から北の方の死を聞く。それにより自らも死を選ぶ場面も彼の愛情の深さを象徴しているだろう。

「時ノ間モ離レガタキ妻子ヲ失レテ、命生テハ何カセン、安カラヌ物哉。七生迄諸直ガ敵ト成テ、思知センズル物ヲ。」ト忿テ、馬ノ上ニテ腹ヲ切、倒ニ落テ死ニケリ。

深く切腹する部分にも武士としての誇りが見て取れる。「忠有テ咎無カリツル」と評されている『太平記』における高貞は、愛情深く、武芸に優れ、忠義に篤い武士と読み取ることができらう。

一方で、『墨染桜』における梅の薫大将はどのように描かれるのであるろうか。『墨染桜』内で梅の薫大将が登場する場面は四か所のみであつた。詳しく人物像を探っていきたい。

最初に登場する場面では八重桜との関係が紹介される。「ばなは、此よしを。みづぐきの。むすぶふたばの、むかしより。むめのかほるたいしやうに。にほひもふかく、あひなれて候へば。」とあり、八重桜とは昔からの恋仲であることが記されている。そして梅の名前は薫大将であり、梅のイメージの中で香りが最も特徴的であると考へられていることがわかる。薫大将という名前からは当然『源氏物語』の薫も想起されよう。確かに梅は桜という女性をめぐる三角関係の一角を担う。しかし、人物像として一致する点はなく、ライバルにあたる薄と匂宮との繋がりも見いだせない。名前を借りることで、三角関係となることを匂わせるとともに、いわば言葉遊びを楽しもうとしているのであろう。

「あひなれ」ていた八重桜が、老薄の元へと去つてしまうのである。梅の薫大将の怒りも激しい物であつた。

かやうに、たはふれて。たがひにきひて、こは口おしきしだいな。折ふても。心ゆるすな、やまざくらとは、これなるべし。その義ならば。すゝきがのべに、ひをかけて。ねはをからさんとぞ、いかりける。

右に引用したように、桜の新たな恋の相手である薄に対する怒りは並大抵ではなく、火をかけて根葉を枯らそうとまで考えるのである。この火をかけるという復讐方法は、『太平記』において、北の方が火の中で没したことも関係があるう。しかし、北の方は敵によって放たれた火に包まれたのではない。むしろ、薄は野焼きと深く関係しており、そこから火をかけるという発想が生まれてきたのではないだろうか。また、梅の花の赤が火を連想させたということも考えられる。

梅の怒りは裏切りをはたらいた八重桜にも向かつている。心を許すのではなかったと事の次第を悔しく思っている様子からは、自らのプライドを傷つけられたことに対する怒りが見て取れる。梅はかなり激しい気性に設定されていると考えて良いだろう。しかし、その場で合戦を仕掛けることはせず、一度見逃したことが次の場面からわかる。

この事かくれなかりしかば。むめの、かほる大しやう。こはいかにと。さはひで。

さて。あわれみをたれ。たすけおきければ。てきとなるこそやすからね。それ、くさのかず、およくとも。木のせいにかつ事。おもひもよらず。

さらば、くわさんのゐんを。はなのぢやうにかまへよとて。一もんをあつむるに（後略）

老薄が武蔵野へと帰り、合戦の支度をしたことが梅の怒りをさらに激しくしたのである。こうして、草木の合戦が始まるのであった。注目したいのは梅の薫大将が「こはいかにとさはひで」、こ

こでも怒りをあらわにしている点である。『太平記』の高貞は高師直の讒言のために命を捨てようと合戦を決める場面においても冷静である。唯一怒りという言葉がみられるのは、彼の最期の場面である。高貞は、部下たちが死んでいき、親類からも命を狙われても、生きながらえ「一軍せん」とする。しかし、妻子が死んでしまったことを聞いた時に初めて怒りをあらわにするのである。妻からの裏切りの有無という大きな違いはあれども、自らのプライドを傷つけられたことにより怒る梅の薫大将とは異なっていると見えよう。

次に、梅の薫大将の戦装束についての記述を見る。

まづ。むめのかほる大しやう。その日のいでたちには。やうばいとうりの、はらまきに。むめのこたちを、むすんでさげ。こうばい月げのむまにのり。すやりおつとり、いでられたり。

お伽草子に多い言葉遊びらしく、梅に関連する語をふんだんに使っている。梅の着ている戦装束が表現されている。また、朱鎗を持っていることから、梅といえは赤という認識があつたことが窺える。残念ながら高貞の戦装束の記述が『太平記』になく、比較は行えなかった。しかし、他の草木の戦装束の表現と比べても、特別詳細には描かれない。さらに、合戦における梅の薫大将の活躍が描かれないのもいささか疑問が残る。元となったと思しき高貞は武芸にも優れた人物であるとされているはずなのである。

後藤氏は『墨染桜』の成立の事情について以下のように述べている（注10）。

擬人の対象を草木にとつた直接的な典拠として、私は太平記の塩治判官讒死の條における花のたとへの一段を提示したい。太平記では禁中の美人たちを色々な花に譬へてある。これは太平記の中でも極めて有名な所であるが、それから思ひついて墨染桜の作者は草木を主題とする擬人小説を作成したのではあるまいか。太平記の塩治判官のくだりが種々の方面に墨染桜と密接な交渉を有する事實は、私をして更に叙上の推定説を懐かしめる。

たしかに『太平記』からの影響は見て取れる。特に後藤氏が全く同じ本文であると挙指摘する部分は興味深い。『墨染桜』から引用する。なお、傍線は稿者による。

あるひは、月もうつろふと、も。とあらの、こはぎ。なみも
いろある、いての山ぶき。あるひは、へんじやうそうじやう
の。わがおちにきと、人にかたるなど。たはふれし。さかの
ゝあきの。おみなへし。
ひかるげんじの、たいしやうの。しろくさけるはと。なをと
ひし。たそがれどきの、ゆふがほのはな。みるにおもひの、
ふかみくさを、さきとして。いづれも、つくり花のごとくに
ぞ、いでたちける。

右は薄が集めた草の勢について述べている部分である。(マ、)
とした部分は『太平記』には「本」とある。傍線部は『太平記』
本文と漢字か否かや句読点以外にほぼ異同がない。

むめは、にほひ、ふかくて。えだ、たおやかならず。さくら
は。いろことなれども。そのかもなし。やなぎは。かぜをと
ぶむる、みどりのいと。つゆのたまぬく。ゑだことなれども、
においもなく。はなもなし。むめがかを。さくらがいろに、
うつして。やなぎのえだにさかせるらんも。このたとへな
るべし。

次に引用したのは梅が中心となる木勢の軍揃えについてである。こちらも同様に、傍線部にほぼ異同はない。この二つの引用部は、『太平記』においては高貞の北の方の容色を称える表現としてひとまとまりで描かれる。擬人化するにあたり、桜の容色を称えるためには確かにふさわしくない表現となつてしまふであろう。とはいえそれを草について述べる部分、木についての部分と分け、軍揃えに転用するのは興味深い引用の方法である。詞としての面白みやリズムのみを生かしているようにも思える。

『墨染桜』の作者が「塩治判官讒死事」を読み込んでいることについては否定する余地がない。しかし、和田琢磨氏のように「私見によれば、『草木』(『墨染桜』)が「塩治」を引いている部分は、全二九丁中はじめの九丁にほぼ収まっていることから、作品全体に影響を与えているとまでは言えないと考える。」という見解もある(注11)。

和田氏の説には首肯できる部分がある。桜が薄に心変わりをすることにより、全体のストーリーは大きく変わつてしまつてゐる。登場人物を草木に変えて「塩治判官讒死事」を忠実になぞつた作品にするのではなく、オリジナリティを出そうとしたと考えられる。そもそも、恋愛における三角関係の構図は「塩治判官讒死事」

に限らず見られるものでもあるだろう。三角関係の恋愛を描こうとした結果『太平記』の有名な章段に思い当り、引用等をしたという可能性すら否定はできないのではないだろうか。

本項で見てきたように、梅の薫大将の行動には『太平記』の影響とも思われる部分があったが、性格にはほぼ共通項がない。梅の薫大将の人物像を作るにあたり、「塩冶判官讒死事」の高貞からではなく、梅という植物に付随するイメージからの影響も受けているとの仮説が立てられるであろう。そこで、『墨染桜』と同じくお伽草子に分類される作品の中で、梅はどのように描かれているのか確認し、梅の薫大将と比較していく。

四、他のお伽草子における梅

草木を擬人化したお伽草子の中に梅が登場するものはいくつか存在するが、本稿ではまず、異類合戦譚に分類される作品であり、梅が主人公となる『月林草』を具体的に取り上げる(注12)。

『月林草』は『墨染桜』と同じく近世初期の作と想定されている。当時の人々が持つ梅のイメージを探るに適していると考え、梗概を記す。

都に近い所に竹林寺という寺があった。開山は竹を寵愛して、棟梁「大竹うゑもんのかみふししげ」を植えたのであった。境内の中には梅もあった。人々は香りがよく花の咲く梅ばかり大切に愛でている。竹は梅への妬みが募り、合戦を挑んだ。梅は兵を用意しておいたわけでもなく、敗北を喫する。大将の紅梅の大納言さねちかは生け捕りにされ、梅漬にされてしまうの

であった。そこに日ごろ親しくしていた六条や葵の葉、夕顔、蕨などさまざまな漬物が集まってきて、自分たちの故事由来を語り、梅漬を慰めようとする。紅梅の大納言は出家を願うようになり、北野天満宮に祈願する。牢守の重石は大納言に同情をよせ、逃がしてくれた。梅法師となった大納言は、弟子の小梅と仏道修行に励むのであった。

『月林草』は竹の梅に対する嫉妬から合戦がおこる。紅梅の大納言さねちかが人々に愛される様子が書かれている部分が興味深い。注目したい部分に傍線を付した。

おもしろかりし、はやしのうちに、たくひすくなき、梅の木あり、こうはいのいろ、うつくしく、はつ春に、なりぬれば、はやさきそむる、にほひより、ちりゆく花の、なこりを見、ふきくるかせも、なつかしく、せんたんのはやしも、かくやらんと
一寺のらうにやく、花のもとにて、しれんくして、哥をよみ、なかき日のくるゝを、おしみあへり、たさんまで、かくれなく、此花のみ、もてあそひける

紅梅の、花の姿も美しいとされているが、何よりもその「にほひ」が素晴らしく、それによって「ふきくるかせ」、つまり、香りを運ぶ風さえも特別なものとなっているのである。梅の香りについては、和歌の世界でも多く詠まれていることはいまでもない。『墨染桜』の梅の薫大将という名とも共通し、梅は香りという考え方は近世初期においても確かなものである。

ここで注目したいのは、梅を愛でる人々が歌を詠んでいる点である。さらに、出家し庵を結んだ後に梅は昔を回想しながら、「心ある人／＼」に哥に詠まれ詩に作られてきたと話す。そして今の自分の姿を小野小町になぞらえている。「花のかたちを身にうけて、宮中に、みやつかへ、花月にこころをうつして、和哥のほまれを、とりしかとも有為てんへんの、ことはりにや、花のすかたも、かれはてゝ」という姿である。『月林草』では梅が和歌に多く詠まれてきたことを何度も繰り返し、雅な世界を持つ、あるいは持つていた存在であることが強調されるのである。そうした背景によるプライドの高さが『墨染桜』の梅の薫大将に備わっていると見る事ができるのではないだろうか。

『墨染桜』の梅と同様に、梅が嫉妬する姿が描かれるお伽草子に『桜梅草子』がある(注13)。異類婚姻譚の一つと考えて良いだろう。室町時代中期頃の成立と想定されており、『墨染桜』以前の作品である。内容的に第一話と第二話に分かれており、梅が登場するのは第一話である。第一話の梗概を以下に記す。

春の半ばの日の夕暮れ、庭に五、六人の女房が現れ、夜明けを前に消えてしまった。後日再び現れるときに、紅梅の薄衣を着た女房と契りをおこなう。七日程後にまた現れたときには、色白の細身の女房に心移りして文を渡す。以前の女房の顔色が変化したのに気づくが、振り切つて帰られてしまう。文もかわしたが、三月になると女房は別れを切り出す。翌晩には前庭の梅の精が御堂の前の桜を打つ夢を見た。夜が明けてみると、桜の枝は打ち折られ、梅も下枝が残るばかりとなつていた。

これは人間の男が、草木が人の形をとつたものと契りを交わす物語である。梅の姿が「こうはいの、うすきぬきたるか、しきりにかほりて、なつかしく、あらまほしき、さま」であつたことから男は彼女に惹かれる。やはりここでも梅の香りは欠かせないものとなつている。一方で桜に惹かれる場合は「色しろく、ほそやかなる、すかた、ありさま、らうたけにゆふなるに」が理由であり、姿形が秀でていることが特徴であるようだ。男が心変わりしたことに梅は怒り、桜を攻撃する。

まへのせんさいの、梅の枝より、はしめ、ちきりし、女はう、四五人つれて、色／＼の、つえをもちて、物をうたんとする、けしきにて、いきとをり行を、みれば

かたはらなる、御たうの、まへなるさくらのもとに、行つゝ、のちの女はうと、おほしき人を、さん／＼に、うちあひたり

右のように桜を打つ様子に男は「あさまし」と感じている。男女の違いはあれど、この激しい怒りは『墨染桜』の梅の薫大将にもつながっているように思えてならない。

また、『月林草』と『桜梅草子』では、梅は和歌を詠んでいる。しかし、薫大将はその名前から『源氏物語』が連想されるにもかかわらず、和歌を詠むなどの貴族的な雅やかさを持った行動をしている姿は描かれない。そうした行為は薄のみがしているのである。合戦を中心に描こうとする作者の意図に由来するものか、桜が薄にとられてしまう理由として、貴族性の有無が関わるのであ

ろうか。少なくともこの貴族的な要素の薄さは『墨染桜』の梅の特徴の一つとしても良いと考える。

五、おわりに

ここまで、『太平記』や御伽草子『月林草』、『桜梅草子』と比較しながら、『墨染桜』における梅の薫大将の特徴について考察してきた。しかし、和歌や謡曲などからの影響については未だ不十分であると思われる。さらに、『墨染桜』全体を貫く特徴や作者の創作意識について、あるいは挿絵など考察すべき点は数多くあると考える。これらを今後の課題として提示したい。

注

(1) 本多朱里「『草木太平記』の諸問題」(『京都大学蔵むろまちものがたり第八巻』臨川書店、二〇〇一年九月)

(2) 横山重、松本隆信編『室町時代物語大成 第八巻』(角川書店、一九八〇年二月)

(3) 徳田和夫編『お伽草子事典』(東京堂出版、二〇〇二年九月)

(4) (1)に同じ。

(5) 諸本が五つあるという指摘は、松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』(三省堂、昭和五七年)によってなされている。

(6) 後藤丹治「墨染桜」『改訂増補戦記物語の研究』、磯部甲陽堂、一九四四年)

(7) 『太平記』における引用及び、梗概等は全て後藤丹治、釜田喜三郎、岡見正雄校注『日本古典文学大系 34〜36 太平記

1〜3』(岩波書店、一九六〇一月〜一九六二年十月)に拠った。

(8) 「新編国歌大観」編集委員会編『新編 国歌大観』(角川書店、一九八三〜一九九二年)

(9) 木下武司「万葉のアシ・オギとススキ(オバナ) 後篇―万葉人はどう区別したか―」(『美夫君志』八九号、二〇一四年一月)

(10) (6)に同じ。

(11) 和田琢磨「太平記」を纏う物語——『草木太平記』『諸虫太平記』を中心に(『古典遺産』第五九号、二〇〇九年二月)

(12) 横山重、松本隆信編『室町時代物語大成 第四巻』(角川書店、一九七六年三月)

(13) 横山重、松本隆信編『室町時代物語大成 第五巻』(角川書店、一九七七年、三月)

(なかじま・めぐみ/東京学芸大学大学院修士課程)